令和元年度

福井県小学校長教育研究
若狭大会研究紀要

2019 No.47

福井県小学校長会

新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く
日本人の育成を目指す小学校教育の推進

ー豊かな心と確かな学力を身につけ
夢と希望に向けて共に生きる子供の育成ー

研究紀要　No.４７（２０１９）

福　井　県　小　学　校　長　会

全体会

第71回 福井県小学校長教育研究 若狭大会

福井県小学校長会
副会長
増田 実典
福井県小学校長会
副会長
松田 博明
福井県小学校長会
会長
山口 満

福井県教育委員会
教育長
豊北 敏一
小浜市長
松崎 晃治
小浜市教育長
窪田 光宏

分科会

目　　次

挨　　拶	福井県小学校校長会会長	山口　満	・・・　5
祝　　辞	福井県教育委員会教育長	豊北　欽一	・・・　7
	小　浜　市　長	松崎　晃治	・・・　9

○大会要旨

大会主題・大会趣旨	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11
大　会　日　程	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
分　科　会　概　要	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13

○分科会主題別研究

第１分科会	提案者	勝山市立鹿谷小学校	山口　きみ子	・・・　16
第２分科会	提案者	越前市武生西小学校	松澤　紳	・・・　18
第３分科会	提案者	敦賀市立咸新小学校	小林　俊則	・・・　20
第４分科会	提案者	越前町立四ヶ浦小学校	大川　伸介	・・・　22
第５分科会	提案者	福井市本郷小学校	新道　正芳	・・・　24
第６分科会	提案者	永平寺町御陵小学校	増田　実典	・・・　26
第７分科会	提案者	あわら市本荘小学校	志田　智子	・・・　28
第８分科会	提案者	高浜町立和田小学校	平田　克明	・・・　30

○福井県小学校長教育研究大会主題・副主題一覧表　・・・・・・・・・・・・・・・　32

○あとがき

福井県小学校長教育研究委員長	小浜市立小浜小学校	森　徳実	・・　34

挨　　拶

福井県小学校長会
会長　山口　満

皆さん、こんにちは。

今年の夏も記録的な猛暑に襲われ、雪、雨、風だけでなく、太陽までも災害の対象と考えなければならない時代に入ったのかもしれません。本日、令和最初の第７１回福井県小学校長教育研究若狭大会を、古代から御食国と呼ばれ、都の食文化を支えた歴史、食や祭礼などさまざまな文化が息づき、地域力を結集した協働による『「夢、無限大」感動おばま』の実現に向けまちづくりに取り組んでおられるここ小浜市において、このように盛大に開催することができましたことは、小浜市、おおい町、若狭町、高浜町の温かいご支援とご協力の賜物と受け止めております。会員を代表いたしまして、深く感謝申し上げます。また、本日は公務ご多用の中、福井県教育委員会教育長　豊北欽一様、小浜市長　松崎晃治様をはじめ、多くのご来賓の方々にご臨席を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

本大会では、『新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進』を主題として、『豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子供の育成』を副主題に設定し、学校経営、教育課程、自立と共生、危機管理など、八つの分科会において提案と協議が行われます。学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性の在り方について、新しい学習指導要領の趣旨を含め、さまざまな視点から小学校教育のグランドデザインの創造とそれを具現化する方策について、充実した研究・協議になるようにしたいと考えております。本日の分科会で提案を準備していただきました各校長先生方、本当にありがとうございます。また、司会、記録、運営の校長先生方、よろしくお願いします。

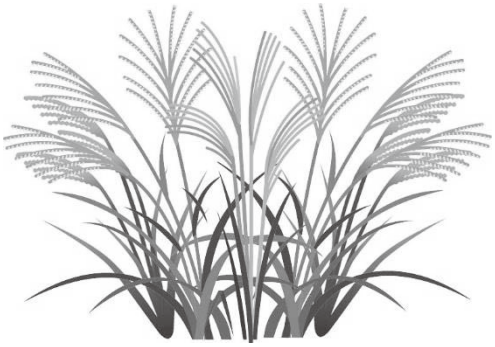
この研究大会は本年で７１回目となり、本県の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究協議、実践を積み重ね、学校経営、さまざまな教育課題への対応等について多大な成果を上げてきています。令和２年１０月には、第５５回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究福井大会がフェニックスプラザを主会場として開催されます。本日の研究大会、本年１０月に富山市で開催される東海・北陸地区連合小学校長会教育研究大会での研究成果をさらに深化・充実させ、来年の東陸福井大会での研究発表につなげていけるよう、県内小学校長全員で一致団結して取り組んでいきたいと思います。

さて、今日、知識基盤社会への新たな進展やグローバル化の進行、急激に進む少子高齢化等により、さまざまな改革と対応が求められています。小学校教育においても、学習指導要領の改訂に伴い激しく変化する社会の中で、自立した人間として他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力の育成が求められています。こうした中にあって、令和２年４月から新しい学習指導要領がスタートします。学校は、新たな価値を創造し、社会を生き抜く力を身に付けた日本人の育成を目指すために、確かな学力

や豊かな心、健やかな体の調和を重視する『生きる力』を育む教育を実現するため、校長は明確なビジョンを掲げ、学校組織の活性化を図り、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努めなければなりません。さらに、グローバル化に対応できる人材の育成を目指す英語教育の充実・強化、いじめ等問題行動の防止に向けた人権教育と道徳の教科化、質の高い教育活動を実現するための教職員の資質能力の向上、特別支援教育の充実、働き方改革・業務改善による教師が子どもたちと向き合う時間の確保など、対応すべき重要課題が山積しています。また、危機管理体制の見直し、安全指導の充実、関係機関との連携を強化した防災教育の推進も喫緊の課題となっています。

このような状況の中で、校長は現状を深く認識し、教育改革の動向を的確に把握しながら、リーダーシップを発揮し、確かな計画と実行力をもって教育の成果を上げていかなければなりません。私たちは、組織の総力を挙げて課題解決に努めるとともに、積極的に政策提言を進め、もって県民・国民の信頼に応える必要があります。そのために、校長は自らの使命を自覚し、権限と責任の下に、未来社会に夢と希望を持ち、たくましく生きる児童の育成を志向して、活力ある学校づくりに努め、本県の教育がさらに充実したものとなるよう舵取りをしなければならないと考えています。

最後に、本研究大会に向けて、開催までの計画・準備や大会運営にご尽力いただきました若狭地区の校長先生方をはじめ、関係各位に心からお礼を申し上げ、開会の挨拶といたします。



祝　　辞

福井県教育委員会
教育長　**豊北　欽一**

８月１日付で県の教育長に就任しました、豊北と申します。県内全ての小学校の校長先生方が一堂に会しまして、福井県小学校長教育研究若狭大会が盛大に開催されますことをお喜び申し上げます。今年は第７１回目ということで、まさに伝統ある大会と推察されます。また、皆様方には、日頃から本県の教育力向上のためにご尽力されていることに敬意を表しますとともに、感謝申し上げます。今年度も全国学力・学習状況調査では、全国トップクラスの結果が出ました。これもひとえに、校長先生をはじめ、先生方の熱心な授業研究の取り組み、教育に対する強い責任感の賜物と思います。

私は、６年４カ月ぶりに教育庁に戻ってまいりました。以前は教育政策課長や教育庁企画幹として５年間教育行政に携わり、教育振興基本計画や不登校対策指針、児童生徒の個人状況・学校対応状況シートの策定をしました。また、若狭地区や坂井地区の高校再編、幼児教育や職業教育の充実、不祥事や訴訟などもありました。特に高校再編のときには、地区の懇談会で丁寧に行いましたし、地元の市町の議会でも説明した覚えがございます。この４年間は、新幹線の用地買収、小浜・京都ルートの実現などに取り組んできました。毎日、用地事務所の職員と作戦会議を行いながら、約１５００人の地権者の了解をいただき、約２００件の建物移転を行いました。先日、土地収用法による強制収用が１件もないことが、日刊県民福井で取り上げられていました。参考までに、７月２０日付の東洋経済で年縞博物館の山根館長が記事で取り上げていますので、またご覧いただきたいと思います。こうした私の経験を生かして、福井の将来を担う子どもたちが真に必要な教育を受けられるよう、現場の意見を十分お聞きして誠心誠意取り組んでまいりますので、よろしくお願いします。

就任後、全ての市町の教育長と個々にお話しをさせてもらいました。平均２０～３０分、長い方だと４０分ほど話をしました。「通常学級にも発達障がい児が増えてきている。外国人児童生徒への対応も大変、探究活動や体験活動を通してふるさと愛を育む、そういう教育を大事にしていきたいので県の支援をお願いしたい。」そのようないろいろな意見をいただきました。小学校の教育につきましては、市町の教育長との会議で十分に協議・相談しながら進めさせていただきます。

本日、私から校長先生に５点お願い申し上げたいと思います。１点目は、教職員はもちろんのこと、家庭、地域から信頼され、子どもたちが通うのが楽しい学校づくりをお願いします。私は小学校時代に、絵が好きで、絵をコンクールに出していました。担任の先生に絵のコンクールを教えていただいて、常に絵ばかり楽しく描いていました。また、お楽しみ会では皆の前で落語を披露しました。私は福井市の木田小学校出身で、６年生のときに学校から歩いて文殊山に登りましたが、小学校６年生にとっては大変つらかったです。遠足といえばそれしか覚えていませんが、ぜひ、そういう思い出が残るような教育をしていただきたいと思います。

２点目に、働き方改革や学校内の問題発生に対して、校長の強いリーダーシップと迅速な対応をお願いしたいと思います。もちろんいきなり働き方改革といっても、難しい問題はさまざまあると思います。できることからしっかりと進めて、先生方が心身共にゆとりを持って子どもと向き合える環境づくりを進めていただきたいと思います。県民も注目しています。教員だけは別だということではありません。ブラック職場として思われては、優秀な教員が入ってきません。校長のリーダーシップと風通しのいい職場づくり、問題が生じたら、先生一個人で抱え込まずに情報を共有して初期段階から迅速に対応する、事の重大さによっては市教育委員会に話を上げ弁護士の力を借りるなども重要だと思います。

３点目に、若手教員が心の病になって、戦列から離れていくのが見られます。若手教員は、先輩の忙しさを気にして相談できず、抱え込んでいるかもしれません。校長の皆さんが教員一人一人に目を配るとともに、特に若手教員にはフォロー体制をぜひ考えてください。今、私の息子は商社系の会社にいますが、「この会社に入ってよかった」と言います。「なぜ」と聞いたら、「仕事をしながら、常に周りがいろいろな質問をしてくれる、自分の考えも求められる、声掛けをしていることによって周りと一体感で仕事をしている、だからこの職場は本当に良かった」と言っています。教員の職場は、皆さんお忙しいのは分かりますが、特に若手教員に対しては、再任用の先生、教科の先輩を含めて、ぜひしっかりと一人一人サポートしていただきたいと思います。１人だけでなくて２人ぐらい付けたほうがいいと思いますので、それは校長先生が工夫していただきたいと思います。

次に、４番目として、授業名人のレベルを目指して授業力を磨いてほしいということです。授業名人の授業を受けられる生徒は幸せなのです。逆に、受けられない子どもは不公平を感じます。授業名人と授業名人でない先生で、逆に子どもにとってみれば不公平とも見られるわけです。ぜひ授業名人のレベルを目指して授業力を磨いてもらいたいと思います。

最後、５点目は、杉本知事は徹底現場主義を提唱していますが、私は知事に負けないぐらい、もともと教育現場の事業など、これまで子どもたちの活動の姿も見てきていますし、ぜひこれからも見に行きたいと思っています。また、皆さん、教育長にぜひこれだけは聞いてもらいたいというご意見がございましたら、例えばメールで送ってください。送っていただければ私は必ず目を通しますので、何か意見があればぜひお願いします。先日、土曜日に県立図書館で、荒川洋治さんという現代詩作家の講演がございました。恩賜賞や日本芸術院賞を受賞したのをきっかけに、講演を行っていただいたのですが、荒川洋治さんの好きな詩が一つあります。詩集『心理』の一節に『宝石の写真』というものがあり、そこに『なにもかもが、なにかの土台になるような、ああそんなことになりたいな』という一節があります。私は何か教育や人生に通じる言葉のように受け止めています。

夏休み明けは子どもの心が大きく揺れる時期でもあります。また、今後も気温が高い日が続くと予想されます。熱中症の予防をはじめ、学校内の施設・設備や通学路の安全点検など、事故防止に万全を期すようお願いいたします。皆様方のますますのご健勝と、本大会が実りあるものになるよう、心より祈念して挨拶とさせていただきます。

祝　　辞

小浜市長　**松崎　晃司**

皆さん、こんにちは。

ご紹介いただきました、小浜市長の松崎です。本日は、ようこそ小浜市にお越しいただき、心から歓迎を申し上げます。今日は県下の小学校の校長先生がお集まりになるということで、大変懐かしく思います。私も昔、教職に就いておりまして、ちょうど会長をしておられる山口校長先生とは、昔バレーボールで国体等に一緒に出て、共にプレーをさせていただいたこともあります。非常に親しみを感じるところで、皆さんが今、教育の場で一生懸命頑張っていただいていることにつきまして、心から敬意を表したいと思います。私は、今、政治の世界におりますが、当時は良い時代で、楽しかった思い出がたくさんあり、子どもたちと過ごしたことは非常に面白かったと今になって思っています。私は、どちらかというと大人ばかりと一緒に過ごしておりますので、今、教職員時代を懐かしく感じるところです。

現在、学校教育の現場では、２０２０年度から小学校での新学習指導要領の全面実施に向けて、主体的・対話的で深い学びの在り方、子どもたちに育むべき資質能力を明確にした上でのカリキュラム・マネジメントの研究などが進められています。そして、国の働き方改革の推進の動きの中で、私ども地方自治体におきましては、学校業務の改善方針を策定して具体的な取り組みを行っているところで、山積している課題に対して学校の責任者である皆様方のご苦労を心からお察しする次第です。

今、人口減少という時代になってきて、これは日本では経験したことのないことです。今までずっと増えてきていて、減っていく時代になりました。これはパラダイムシフトとも言われますが、今までの成功モデルが通用しなくなってきていることを感じています。われわれもずっと市政を推進していく中で、これまで成功してきたことを取り入れてやっていたのではもううまくいかない、そういう時代になってきていることを痛感しています。新たなことを考えて、失敗を恐れずにやっていかなければならない時代になってきました。恐らくこれから子どもたちはそういう時代に育っていくと思うわけです。今の小学生の６５パーセントが今ない職業に就くとも言われています。そういうことになってきたら教育は、本当に自分で考える力を付けておかなければならないと私は痛感するわけで、本当に大変な時代になってきたと思います。

われわれの時代と違って、今、教育の現場では大変忙しい状況になっていると思います。多種多様なことを考えていかなければならない時代になってきているので、校長先生方は大変だと思います。さらに、国の働き方改革推進の動きの中、先生方は非常に真面目なので、スクラップ・アンド・ビルドでも、このスクラップのほうがしにくいのではないか、新しいことをどんどん取り入れてきて、スクラップがなかなかできていかないのではないかとも私は非常に心配しているところです。私ども行政としてはできる限り、その辺りもよく理解しながら協力していかなければならないのではないかと思っているところです。そう

は申しましても、日頃、地域の未来を担う人材を育てるのは本日ご参会の校長先生、教職員の皆様なので、ぜひともこれからもわれわれが教育を担っていくという気概を持って、日々の学校運営に当たられることを心から期待する次第です。

さて、ここで、小浜のことも少し言わせていただきたいと思います。先ほど山口校長先生の話にもありましたが、ここは御食国と呼ばれていて、御食国とは御食の国という意味で、御食とは朝廷に捧げる食です。奈良、京都の都に食材を提供してきており、海産物を中心に食材の大変おいしい所です。また、この小浜は海のある奈良とも言われています。この地域は古い神社仏閣、いろいろなものがあるわけです。それらの文化が今なお息づいており、豊かな自然、食、文化、そういうものが本当にたくさん残っております。

このような環境に恵まれている中、私ども小浜市においては、今、サバの養殖に取り組んでいます。これは、日本遺産に認定され、鯖街道というものが注目されるようになりましたが、実は残念ながらこの時代に小浜から京都へ運ぶサバがありません。あまり獲れなくなってきており、近年は１トンぐらいしか獲れない状況になってきているので、これではせっかく鯖街道といっても駄目なのではないかということで、３年前からサバの養殖を８００匹ぐらいから始めました。現在、１万尾以上の養殖ができるようになっており、市場に出回るようになってきました。これで鯖街道ということを頑張ってＰＲできると思っていますが、京都からは今、「もっと送ってほしい」と言われています。そういうことで始めたサバの養殖が軌道に乗りつつあります。水産業では、魚が獲れなくなっていることから、養殖をしっかりと始めているところです。

そのような中、昨年、若狭高等学校で開発されたサバの缶詰が宇宙航空研究開発機構、通称ＪＡＸＡで宇宙日本食に初めて認定されました。高校生が開発した食品が宇宙日本食に選ばれるのは全国で初めてです。そのサバ缶のサバは、酔っぱらいサバという名前を付けていますが、小浜の酔っぱらいサバが使われていて、それがうまくいけば年内中に宇宙食に認定されて宇宙へ行く可能性が出てきています。こうした自然の中でさまざまな発想をしてくれる子どもたちも育ってきていることを大変嬉しく感じているところです。こうした特色ある歴史、食、伝統文化、こういうものをこれから大事にしていきたいと思っています。皆様にも、ぜひこの機会にそういったものに触れていただければ幸いと思いますので、どうかよろしくお願いいたします。

結びになりますが、本日の研究大会が実り多きものとなるようにご期待申し上げますとともに、本日ご参会の皆様方のご健勝、ご多幸、今後のさらなるご活躍を心からご祈念申し上げましてご挨拶とさせていただきます。本日はご盛会、誠におめでとうございます。

令和元年度　第７１回 福井県小学校長教育研究若狭大会

１　大会主題

「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
－豊かな心と確かな学力を身につけ
夢と希望に向けて共に生きる子供の育成－

２　大会趣旨

今日，知識基盤社会化やグローバル化が進む中，様々な社会的要因が絡み合い，困難な社会的問題や現象が出現している。これらは，教育の分野にも大きな影響を与え，既成の知識体系の枠を超えた新しい知のパラダイムが求められている。即ち，自ら考え主体的に判断する力，幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて新しい知や価値を創造する能力が必要とされているのである。

このような状況を踏まえたとき，小学校教育においては，確かな学力，豊かな心，健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが責務となる。

そして，真に豊かな社会を築くためには，「主体的に生きる力」と「他者と共に生きる力」の両輪が不可欠である。つまり，一人一人が豊かな知性と感性に裏打ちされた人間性を育みながら自己実現を目指すことと，地球的規模の視野や人とのつながりを大切にした生き方を確立することが求められる。

今後，私たちには，自己の確立とともに国を超えて共に生きることがますます強く求められると考える。このような時代にあっては，私たち一人一人が様々な情報に振り回されることなく，粘り強く相互に理解し合い，共に生きることができる道を探っていくことが極めて大切となる。特に次代を担う子供たちには，情報を正しく読み取り判断する力，問題を発見し解決する力，他者と円滑にコミュニケーションする力など「自立と共生」の力が求められている。

そのためには，先ずは子供たちに「夢と希望」を育むことが必要だと考える。「夢と希望」があってこそ，子供たちは学ぶことの意味を見いだし，未来を切り拓くために努力することができると考えるからである。

特に，人間形成の基礎を培う小学校教育においては，子供一人一人が目標を明確にし，互いに切磋琢磨しながら学び，自ら考え，身につけた知識・知恵を発揮して新しい知を創造し，人間性豊かな未来社会に向かって，夢や希望を現実のものにする力(実現力）を育むことが重要である。

そこで，副主題に「豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子供の育成」を掲げ，下記の８分科会において校長の役割を究明していく。

（１）学校経営（２）教育課程Ⅰ　（３）教育課程Ⅱ　（４）現職教育
（５）危機管理（６）社会形成能力（７）自立と共生　（８）連携・接続

３　主　催　　福井県小学校長会

４　後　援　　福井県教育委員会
小浜市　　高浜町　　おおい町　　若狭町
小浜市教育委員会 高浜町教育委員会 おおい町教育委員会 若狭町教育委員会

５　日　時　　令和元年８月２１日（水）　１３時３０分　開会

６　会　場　　全体会　ＪＡ若狭本店（会館および活性化センター）
小浜市遠敷８－８－１　　ＴＥＬ　（０７７０）５６－５０００
分科会　小浜市立小浜美郷小学校
小浜市金屋３９－８　　ＴＥＬ　（０７７０）５６－０７７３

７　日　程

時　刻	11：30～ 13：00	13：00～ 13：30	13：30～ 14：00	14：00～ 14：30	14：30～ 16：20
内　容	打　合　せ　会 運営委員 司会者 提案者 記録者	受　付	開　会　式 （全体会）	移　動	分　科　会 （閉会式）
会　場	小浜市立小浜 美郷小学校	ＪＡ若狭本店 玄関ホール	ＪＡ若狭 本店３Ｆ		小浜市立小浜 美郷小学校

８　開会式

(1)　国歌斉唱
(2)　県民歌斉唱
(3)　挨　拶　　福井県小学校長会　会長　　山口　満
(4)　来賓祝辞　　福井県教育委員会　教育長　　豊北　欽一　様
小　浜　市　長　　松崎　晃治　様
(5)　来賓紹介

９　分科会

（１）研究領域・研究課題・研究の視点・会場

分　科　会	研　究　課　題	研　究　の　視　点	会　場
第１分科会 学校経営	創意と活力に満ちた学校経営	(１)将来を見据えた明確な学校経営ビジョン (２)学校経営ビジョンの具現化を図る活力ある運営組織の構築 (３)学校教育の充実を図る評価･改善の推進	小浜美郷小 ３年１組
第２分科会 教育課程Ⅰ	知性・創造性を育む教育課程	(１)確かな学力を育む教育課程のマネジメント (２)しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程のマネジメント	小浜美郷小 ３年２組
第３分科会 教育課程Ⅱ	豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程	(１)豊かな心を育成する教育課程のマネジメント (２)健やかな体を育む教育課程のマネジメント	小浜美郷小 ４年１組
第４分科会 現職教育	学校の教育力を高める研究･研修とミドルリーダーの育成	(１)教員の意識改革を促し、資質･能力の向上を図る研究･研修の推進 (２)確かな展望と豊かな人間性をもち行動できるミドルリーダーの育成	小浜美郷小 ４年２組
第５分科会 危機管理	子どもを取り巻く様々な危機への対応	(１)自らの命を守る安全教育の推進 (２)いじめや不登校などを生まない学校づくりと危機管理システムの構築	小浜美郷小 ５年１組
第６分科会 社会形成能力	社会形成能力を育む教育の推進	(１)社会に参画する力･態度の育成を目指す教育活動の創造 (２)豊かな未来の実現に貢献する力を育むキャリア教育の推進	小浜美郷小 ５年２組
第７分科会 自立と共生	自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進	(１)子どもの自立を図る特別支援教育の推進 (２)「持続可能な社会」を目指した環境教育等の推進	小浜美郷小 ６年１組
第８分科会 連携・接続	家庭・地域・異校種等との連携･接続の推進	(１)家庭･地域等と連携し、課題の解決に向けて取り組む学校づくりの推進 (２)異校種間の連携と円滑な接続を図るための組織的な取組の推進	小浜美郷小 ６年２組

（２）司会者・提案者・記録者・運営委員（敬称略）

分科会	研究領域	司会者	提案者	記録者	運営委員
1	学校経営	荒土小学校 道関　直哉	鹿谷小学校 山口　きみ子	平泉寺小学校 久保　真理子	梅の里小学校 金本　訓郎
2	教育課程Ⅰ	南中山小学校 玉木　茂明	武生西小学校 松澤　紳	南条小学校 今村　公一	口名田小学校 早川　弥生
3	教育課程Ⅱ	黒河小学校 平井　和雄	咸新小学校 小林　俊則	美浜西小学校 知場　克幸	内浦小中学校 大野　伸也
4	現職教育	織田小学校 駒野　千津美	四ヶ浦小学校 大川　伸介	常磐小学校 山本　一博	野木小学校 赤城　俊彦
5	危機管理	清水東小学校 髙澤　輝美	本郷小学校 新道　正芳	安居小学校 田中　範継	加斗小学校 地村　健一
6	社会形成能力	志比小学校 河野　章次	御陵小学校 増田　実典	志比南小学校 川鰭　和美	大島小学校 渡邉　奈緒美
7	自立と共生	芦原小学校 島田　充寿	本荘小学校 志田　智子	北潟小学校 番匠　裕美子	瓜生小学校 千田　浩司
8	連携・接続	高浜小学校 時岡　常和	和田小学校 平田　克明	佐分利小学校 藤田　和彦	今富小学校 山名　聡

第１分科会　　－　学校経営　－

研究課題　　**創意と活力に満ちた学校経営**
研究発表題　　**勝山はひとつ　～市教委と共に進める業務改善～**

勝山市立鹿谷小学校長　山口　きみ子

Ⅰ　研究の視点

勝山市の小学校９校は、足並みを揃えながら、それぞれが工夫し地域に根ざした教育を進めている。ここでは、業務改善や特色ある教育の推進に向け、勝山市教育委員会と校長会が共に進めてきた以下の取組についてまとめる。

（１）働き方改革　　（２）英語教育
（３）ユネスコスクールとしてのESD

Ⅱ　研究の概要

（１）働き方改革

市校長会に「調査・働き方改革部」を設置し、月1回会議を持ち、結果を毎月の校長会で報告した。その報告を元に、校長会で協議しながら教育委員会と共に働き方改革を進めた。

まずアンケートを実施し、学校と教員が担うべき業務を明確化し、適正化の方向性を整理した。それを受けて、以下のことについて改革を行った。

〇これまでの改善実施事項

・学年はじめ休業日の２日延長
・お盆の学校閉庁３日を実施
・各学校での行事の精選
・卒業証書の公印印影
・「校長業務の手引き」作成

〇本年度校長会で進めていること

・教職員へのインフルエンザ予防接種開催
・PCの文書保存形式の一本化
・公的機関からの配布物の縮減と配付方法の変更
・提出書類の検討
・一人職の業務内容の精選と共通化

（２）英語教育

勝山市は、平成26年度から5年間、文科省から英語教育の特区指定を受け、先進校として研究を進めてきた。校長会の意見を尊重した市教委施策の結果、次のようなことが実現している。

・日本人の英語支援員（市単）２名配置
・小学校ALT（市単）２名配置
・各学校へのALTや支援員の配置方法についての検討

担任がT1として授業を進めるが、よく慣れた日本人の英語支援員は、とても心強いパートナーである。また、昨年度途中から２名になったALTもとても熱心で、英語授業の打ち合わせも短時間でできるようになった。

（３）ユネスコスクールとしてのESD

勝山市の全小中学校は、ユネスコスクールに加盟している。持続可能な開発への教育を全教育課程において、ESDカレンダーの中に位置づけている。各学校では、次のことを行っている。

・地域に即したふるさと教育の実施
・かつやまっ子応援ネットワークとの連携
・ブログをはじめとした積極的な情報発信

Ⅲ　まとめ

働き方改革については、国や県の取組を受け、勝山市でも様々な取組がなされてきた。それに対し、校長会として意見をまとめ、主体的な改革を進めたい。

小さな市である勝山市のよいところは、すぐに相談でき、フットワークが軽いことである。「小さくてもキラリと光る誇りと活力に満ちたふるさと勝山」の子供たちの健やかな成長のために、校長会がひとつとなり、様々な場面で協力していきたい。

◎研究協議内容

竹村　ブログをすることは、働き方改革に逆行すると思ったが、働き方改革に繋がるとわかった。ブログを入れるようになった経緯について伺いたい。

発表者　最初は研究所のホームページを利用していたが、５，６年前にそれが使えないことになり、それに代わる物として研究所から、あるブログ会社を紹介され、勝山市中がその会社のブログを使うことになった。

山本　ブログはホームページより更新がしやすいので便利であると思う。個人情報の取り扱いについて勝山での取り決めはあるのか。

発表者　統一している決まりはないが、年度の初めに保護者からブログへの児童の写真、作品、氏名が掲載されることの承諾書をとっている。写真を載せるときには、児童名がわからないよう写真を撮ったり、写真の中の名前は消したりしている。写真が大きくなるポップアップは、保護者からやめてほしいと言われ、やらなくなったところがある。

無量小路　行事の精選はなかなか難しいと思うが、どういうふうに進めたのか。例えばスキー合宿をやめたとあるが、校長会で根回しをしたのか。

発表者　行事の精選については、各校で精選できる物を考えていって出てきた例である。校長会で何かの行事をやめようと決めたわけではない。スキー合宿を行っていたのは１校だけであったので、他の学校の状況を説明してやめるようにもっていったようである。

甲斐　行事には校内でするもの、保護者とするもの、地域とのつながりの中でするものがあって、やめていくことはなかなか難しいと思う。つながりの中で行事をやめようと思うと大変であるが、ＰＴＡの親子行事はどのようにしてやめていったのか。

発表者　ＰＴＡ行事に関しては昨年のＰＴＡの地区別研修会で勝山中部中学校が「身軽に気軽なＰＴＡ活動」というテーマでＰＴＡの負担を減らすために、奉仕作業の見直し（２回を１回に）、会議の見直し（役員会・実行委員会の時間差開催）、地区懇談会の廃止等の発表を行った。それに、他の学校のＰＴＡも賛同し、各ＰＴＡで見直しを行うようになっている。

道関　本校のＰＴＡも実は保護者自身負担を感じている。そこで今、親子行事について変えようとしている。学級単位の親子行事は複数の子どもがいる場合、複数回参加しなければならない。そこで、全校で３つの親子行事のコースを設け、どれか１つに参加するという案を学校が提案している。

尾形　英語教育とユネスコスクールはトップダウンで始まり、働き方改革の逆の感じがするが、それを自分たちでやっていこう、「勝山はひとつ」と思えるようになった秘訣は何か。

発表者　英語に関しては、始めた年はとても大変だったが、今はどの教員もやってよかったと思っている。文科省の中央研修や視察、公開授業をしなければならないという状況下にあり、みんなでやるしかない、ということでひとつになった。

尾形　勝山の取り組みは全国的にも注目を受けていて国会議員も視察に来た。校長会と行政の市教委がタッグを組んで取り組んだからできたことだと思う。公開授業の授業者にも管理職がしっかり指導を行っていたからこそ素晴らしい授業ができていたと思う。

◎グループ協議内容

A　児童数が少なくなり、学校の中に公民館が入ってきて、学校教育と社会教育の融合を図ることが大事になってきた。これを機会に地域との連携を見直し、子どもたちが多くの大人に見守られている実感をもてるようにしていく。

B　学校経営ビジョンの具現化を図る組織として、部会を作る。その部会をうまく機能させるには、会議の日を決め、確実に行うようにする。また、一人一人に組織の一員として参画させるのが大切。

C　行事について、学校が取り組むべきことかどうか再考する（主体的な活動になるよう、改善・時期変更・廃止する）。人手不足は、外部人材、ライフパートナー、見守り隊を活用。

D　地域とのつながりが強いため行事の精選が難しい。しかし、ＰＴＡにも働き方改革の理解が深まっている。ＰＴＡ会長を巻き込んで進めていけると良い。

（文責　勝山市立平泉寺小学校　久保真理子）

第２分科会　　―　教育課程Ⅰ　―

研究課題　　**知性・創造性を育む教育課程**
研究発表題　　**ダイバーシティ教育を活用した主体的・対話的で深い学び**

越前市武生西小学校長　松澤　紳

Ⅰ　研究の視点

越前市は、グローバル化の進展により、小学校１７校のうち、９校で外国籍児童が在籍している。その総数は、１５０名ほどである。本校（全校児童３４５名）における外国にルーツを持つ児童の割合は、４分の１を越える。若狭大会の大会趣旨の中には、「国を超えて共に生きることがますます強く求められる」とあり、越前市の教育方針に、「うるおいと活力ある共生社会を築くため」とある。そこで、外国籍児童が多数在籍している環境でも、それを強みとして活用し、知性・創造性を育む教育課程の在り方について、研究を推進することとした。

Ⅱ　研究の概要

⑴　ダイバーシティ教育

「お互いの立場や体験の違いから生じる多様性を認め合い、それぞれが意見を出し合い、みんなで議論し、よりよい考えを創出していくこと児童の育成にあたること」をダイバーシティ教育ととらえている。その取組は、それぞれが主体的に意見を持ち、その意見を交流させ、新しい考えを生み出していく授業を構成することであり、新しい指導要領が目指す主体的・対話的で深い学びに迫る取組にもなる。

①　ペア学習の活用

ア　ねらい

・意見を持ち、学習に意欲的に参加。（主体的）
・相手に伝える力を育成。（対話的）
・ペア学習で出た意見を全体授業に活用。
（深い学び）

イ　授業の流れ

・意見を持つ。
・意見を伝える。
・クラスで話し合い、考えを深める。

②　タブレットの活用

ア　授業中にアンケートを採り、円グラフで表示
（主体的な学習へ）

イ　道徳の教材をタブレットに表示
（読み取る道徳から考える道徳へ）

ウ　意見を書くための
ホワイトボードとしての活用
（自分の意見を持ち、ペア学習へ）

エ　意見の焦点化
（意見を焦点化し、深い学びへ）

③　総合的な学習の時間での取組

地域と進める体験推進事業による「西地区よくし隊プロジェクト」（５年生）

ア　西地区をもっと知る会
イ　西地区調べ
ウ　西地区スタンプラリー
エ　プロジェクト活動報告会

Ⅲ　まとめ

⑴　成果

①　弱点と思われる点を強みに変え、その環境を活かす取組を行うことにより，学校の特色ある活動の充実に繋げることができる。

②　校長がリーダーシップを発揮することにより、方向性を共有したり適材適所の人員配置を行ったりすることで、労働時間を軽減したり働きがいを感じることにより多忙感を減らしたりすることができる。

⑵　課題

研究を継続的に推進するため、研究主任の育成と研究の方向性の確認や研究の深化をどう図っていくかが今後、課題となってくる。

◎研究協議内容

大坂　ペア学習を取り入れているということであるが、課題と取り組み内容について、もう少し詳しく伺いたい。

発表者　まず、ペアをどのように作るかということであるが、能力が低い者同士でも意思表示はできるのではないか。２人の意見に差があるときに、良い方の意見を取り上げて、「隣の子がこのように言っていました。」と隣の子の意見を伝えるだけでも良いのではないか。必ず話し合う機会を作ることが大切である。

なぜ、グループではなくペアでの話し合いを取り入れているのかというと、グループでの話し合いに比べて、ペアの方が意見を言いやすい。また、グループでの話し合いの場合、一人を残して残りのメンバーだけで話し合いを進めてしまう場合もある。

話し合うときには、考えるための手がかりを必ず考えておくことが必要で、何らかの反応ができるように教師側が準備しておくことが大切である。

服部　外国人児童に対して取り出し指導に偏らないという説明があったが、何らかの支援体制が取られているのではないのか、具体的に教えてほしい。

発表者　毎年１０名単位で日本語を話せない児童が増えている。そのために、アクセスワーカー１名、外国人加配１名、外国人指導２名が配属されている。

今までは、取り出し指導をして日本語教育を行ってから、学級の授業に参加させていくという考え方であったが、それでは、いつまで経っても追いつくことが難しい。また、日本語指導を行う場合、指導者と外国人児童がマンツーマンになってしまう。そこで、日本語指導が必要な外国人児童を含めた学級の中で、サポートしていく体制に切りかえた。クラスに入って他の児童も含めて指導してもらうことの方がメリットが大きい。また、一緒に活動することで、児童同士が理解し合えるのではないかと考えている。取り出し指導も行っている。

◎グループ協議内容

A　以前から続いている行事や地域と一緒に行う行事が多く、精選するにも難しい。地域との関わりの行事は改革するのはなかなか難しいが、内容の見直しや負担軽減しながら、地域との関わりを絶やさないことが大切である。また、全校一斉に行う行事は、児童の発達段階に応じて対応できるようにすることも大切である。行事精選を考える場合、トップダウンではなく、職員の意見をしっかり聞くことも必要である。

発信力を高めることを目標に、いろいろな場で取り組んだ。特に、授業中、挙手して発言する、間違えても責めないということを意識して続けることにより、自己肯定感が非常に高くなり、それに伴い全国学力調査の結果も向上した。

B　３～４人のグループ学習を取り入れている。グループ学習を行うことによって、学び合い、教え合いがうまくいっている。一斉授業にするとついて行けない児童もいるので、ペア学習やグループ学習で、学習内容を自分のものにする時間が必要である。

授業本来の面白さを追究しないといけない。授業の質を上げることが大切である。

C　外国人児童の場合、言語の学びの面では難しいが、生活習慣に関することでは、日常生活の中で自然に学んでいる。日本語で応援すると、その気持ちをきちんと受け止めている。言葉が話せないといろいろなことができないと思いがちだが、そうではない。

職員会議や指導主事訪問にも教員同士のペア学習を取り入れている。資料の読み合わせをした後に、ペアで質問を考える。子どもにさせたいことは職員にもさせ、そこに校長が入る。会議のやり方を見直すと、会議時間は短縮できる。

D　フリートークを核に学校改革を進めている。協働的な学びで、児童一人一人の学びを保障することで主体的に学ぶ児童が育つ。

表現力を育成するために、発表する機会を多くもつようにしている。発表しやすいように、発表前には、書く作業を取り入れたり、ペア学習を取り入れたりしている。少人数学級では、意見が少なく限定されることがあるので、教員が事前準備として、ゆさぶりをかけるような発問を用意する必要がある。

（文責　南越前町立南条小学校　今村　公一）

第３分科会　　―　教育課程Ⅱ　―

研究課題　　豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程
研究発表題　　豊かな心を育む、地域資源を生かした体験的学習の推進と校長のマネジメント

敦賀市立咸新小学校長　小林　俊則

Ⅰ　研究の視点

昨今、人口減少の進む中で、ふるさとの先人や郷土の歴史、自然や伝統、産業等を学ぶことに加え、体験する活動や地域行事への積極的な参加を通して、ふるさとに誇りや愛着を持ち、新たな活力を生み出す人材の育成が必要とされている。

また、そのような地域での学習は、いろいろな人々とのふれあい等を通して、地域への愛着だけではなく、豊かな心及び人間性を育むことにも繋がっていく。これらをより効果的に実践していくためには、地域の人的資源等を中心とした「地域の教育力」が大事な役目を果たすと考える。

Ⅱ　研究の概要

(1) スクールプランへの位置づけと具現化

「ふるさと・体験学習」の推進を重点項目の一つとして上げ、各学年において「地域」と関わる活動を実施する。

(2) 地域の特性を生かした地域資源の活用

・中池見から学ぶ環境学習の実施
・東郷地区各種団体と連携した活動
・地区内各施設、企業と連携した活動

(3) 地域資源を生かした教育課程への位置づけ

・各学年の学習段階に応じた目標の設定
・教科等横断的な学習活動の展開
・学校と地域との連携・協働

(4) 地域の自然や環境・歴史を題材とした体験活動

①本校の取組

ア　中池見学習・体験活動
・生き物調査（２～５年）
・田植え・除草作業・稲刈り（５年）
・調査内容のまとめ・発表

イ　「瓜生　保」の墓掃除
・地区老人会との連携
・郷土の歴史→日本の歴史

ウ　その他

②松原小学校の取組：松葉かき（体験活動）
・名勝「気比の松原」の環境保全活動
・「歴史や植生遷移の仕組み」の学習
・地域（行政・保護団体等）との連携
・郷土を愛する心の醸成

(5) 各小学校の取組

①地域の文化や歴史を題材とした学習

ア　北地区ふれあい交流事業〔敦賀北小学校〕
イ　柴田音頭・太鼓体験〔粟野小学校〕
ウ　Awamina 芋粥 Project〔粟野南小学校〕
エ　敦賀城と大谷吉継〔敦賀西小学校〕
オ　山の神講・赤崎獅子舞〔赤崎小学校〕

②地域の産業・伝統を題材とした学習

ア　HAPPY COMPANY くつみ〔沓見小学校〕
イ　地区の魅力を発信しよう〔中郷小学校〕
ウ　黒河マナの種まき・収穫体験〔黒河小学校〕
エ　ふるさとＰＲ＆未来を考える会〔敦賀南小学校〕
オ　みかんプロジェクト〔東浦小学校〕

③地域の学校（高校等）を題材とした学習

ア　未来の自分に Lock On〔中央小学校〕

Ⅲ　まとめ

(1) 成果

①ふるさとの歴史・自然・伝統・文化・産業等に興味を持つとともに、学びを深めることができた。

②地域に誇りを持ち、地域の文化や環境・伝統等を守ろうとする気持ちが強くなった。

③スクールプランへの位置づけとともに、地域での協力依頼や取組の情報発信をしたことにより、活動への理解を得ることができ、地域からの支援を多くいただくことができた。

(2) 課題

①これらの学習活動を、学校として、今後も継承していくこと。

②卒業後も、児童が、こうした地域への思いを育み、継続して活動していく手立ての確立

◎研究協議内容

山北　地域の資源を有効に活用するには、地域や各種団体と連携していくことが大事である。その連携を進めていく中で、学校が負担と感じたことや課題などはなかったか。また、その課題等にどのように対応していったのか。

小鍛治　課題に「活動を継続していくこと」、「卒業後も児童が継続して活動していく…」の２点があり、「継続」という言葉が共通してある。学校が地域等に依頼する形だと人が変わると継続は難しくなる。できれば、地域の方が活動を主導する形が望ましい。そのような深い連携にするにはどうしたらよいか。

加藤　地域と連携を図っていくと、各地区からの行事やイベントへの参加依頼も多くなる。学校と地区がウィンウィンの関係になるには、校長はどのようにマネジメントしていくとよいか。

発表者

「外部と学校との関係について」

赴任した４月の初めに、地域の方や各種団体から事業のことで協力の申し出や問い合わせの連絡が入った。学校はこの外部の動きに合わせて進めていくだけでよかった。このように、校長のマネジメントというよりも、本校では外部が主導する体制ができつつある。

「地区と連携を深めていく際の、学校側の負担について」

外部からの依頼をどの学年に振り当てるか、あるいは依頼の諾否については校長がマネジメントしている。

老人会や地区の団体とは、安全安心ネットワークでのつながりや普段から各種会議などで接点があり、良好な関係が維持できている。その分、管理職には負担となっているが、教職員の負担は軽減されている。

◎グループ協議内容

A「ふるさと教育の内容と課題」

ふるさと教育では、取り組みやすい学校とそうでない学校がある。今回の発表のように目的がはっきりしていると取り組みやすく、毎年同じように繰り返し取り組むことができる。

地域の中に題材を見つけることができない学校もある。そのようなときには、「地域の課題を解決する」という視点で地域を見直すとよい。この視点で取り組んだ結果、学校と地域がウィンウィンの関係となった。

しかし、時間のあり方を精選しないと活動範囲がどんどん広がってしまう傾向がある。学校が受け持つ範囲を決めるのは校長のマネジメントの重要な役割である。

「健やかな体を育む」

最近体力が落ちてきた学校や、地域の事情からあまり外遊びをしない学校があると報告があった。一方、外で遊ぶように呼びかけた学校では、最初はけがをする児童も出てくるが、結果として体力は向上しけがをする児童もいなくなった。課題として、これまで教員は丸付けの仕事をしていたので、その時間をどこで生み出すか、検討しなければならない。

鯖江市では、食育に取り組んでいる。給食畑や出前授業を利用するなどシステマチックになっていて誰でも取り組めるようになっている。

B～D

・福井市では「地域と取り組む体験活動の一覧表」を作成しており、この表により見通しをもって取り組むことができている。
・お祭りなど地域の素材や資源は豊富にある。教科横断的にどのようにつなげていくかが課題である。
・管理職は地域の団体とのパイプ役を務めるべきである。ふるさと学習をどのようにマネジメントしていくか、管理職の役割が大きい。
・地域からの依頼や要請に対しては、持続可能かどうかで判断している。
・地域連携は、小規模学校の方が取り組みやすい。
・「地域と進める体験事業」により活動内容が増えており、スクラップが必要になっている。地域とは交渉できるが、市町が主導しているものについては対応が難しい。

（文責：美浜町立美浜西小学校　知場　克幸）

第４分科会　　－　現職教育　－

研究課題　　**学校の教育力を高める研究・研修の推進とミドルリーダーの育成**

研究発表題　　**若手育成のための OJT と同僚性の向上**

越前町立四ヶ浦小学校長　大川　伸介

Ⅰ　研究の視点

「学び続ける教師」であるために、校内の研修体制をどのように構築するかは、校長の果たす大きな役割の１つである。効果的な研修とするには、学校規模や職員構成、抱えている課題を考慮して、実施していかなければならない。また、研修時間を確保するには、勤務時間への配慮を必要とし、限られた時間をどのように活用するか、工夫が求められる。

勤務校は、１クラス２０名弱の小規模校である。学級担任のほとんどを中堅教員が占めており、その仕事ぶりは安定していて同調性もある。しかし、互いの指導にはあまり干渉しない傾向が見られ、それぞれの良さが組織全体に発揮されているかという点では、物足りなさを感じた。「相談する・相談される、教える・教えられる、助ける・助けられる人間関係」である同僚性を高めることは、組織全体の活性化につながると同時に、個々の成長を促すことに大きく関与している。そこで、同僚同士が、授業や校務について積極的にコミュニケーションを持つことに重点をおき、校内研修を実践した。

Ⅱ　研究の概要

(1) 若手育成のための OJT

教員としての必要な基礎的・基本的な能力を身に付けさせるとともに、様々な業務に積極的にチャレンジしようとする意欲を持たせる OJT を心がける。

(2) 長期休業を利用した校内研修

学校の実態や教職員のニーズに合わせた内容を企画する。専門家からの助言をもとに、具体的な対応策を考えたり、先輩教員から教育技術を学んだりする。

(3) 同僚間の学び合い

授業技術や学級経営等について、同僚と話す機会を設けて同僚性を高める。ミドルリーダーには、学校教育の牽引と学校運営への積極的な参画を期待する。さらに、各職員の自己有用感とモチベーションの向上を目指す。

①ペア参観・放課後トーク

ペアをつくり、期間内に互いの授業を１時間ずつ参観する。授業者と参観者が放課後３０分程度話す。

② ミニレク（Mini Lecture）

各教職員がもっている知識や技能を同僚に伝える。内容は自由、金曜日の放課後３０分間で行う。

(4) 次年度の研修に向けて

本年度の校内研修を振り返り、職員からの要望や改善点を次年度に活かす。授業研究では、新たな方向性や視点をさぐるために、研究発表会等に積極的に参加して、先行事例を学ぶ。

Ⅲ　まとめ

若手育成のための OJT の推進や、同僚性を重視した研修の実施によるためか、次年度の教育活動を協議する場では、若手も含めて全員が積極的に意見を出すなど、学校運営への参画意識の高まりが見られるようになった。教職員集団がチームとして機能するための素地は築かれたが、目標達成までの具体的なプロセスの共有が不十分だったために、学校全体として目に見える成果をあげるまでには至らなかった。

組織力ある学校づくりを進めるためには、同僚性を土台とした職場づくりが必要である。そして、その上で、個々の力を結集するために、取り組むべき課題を重点化し、解決するためのプロセスを明確にする必要がある。今後も教職員一人一人のよさが、組織全体に発揮される学校づくりを進めていきたい。

◎研究協議内容

伊部　ペアをつくり互いの授業を１時間ずつ見せ合うペア参観の取り組みについて、期間、回数、その間の補欠について教えてほしい。

発表者　期間は連続した２週間とし、校長が教務と相談して決めている。２学期に２回行う。補欠は校長、教頭が行くことを伝えたが、実際は授業の入れ替え等で行っていた。

山本　若い先生を難しい学級の担任に抜擢したと言っていたが、校長として不安はなかったか。

発表者　校長としてとても悩んだ。確かに簡単ではなかったが、校務分掌を減らしてサポート体制を整えるなど常に気にかけるよう心がけた。

志田　ペア参観で使用した「参観ノート」について、書き方等、詳しく教えてほしい。

発表者　Ａ４版１枚のシートを使用した。上半分が参観後の感想（メモ程度）、下半分は放課後トークで二人が何を話したかをメモ程度で書けるようにした。それらをまとめ、印刷して全員に配布した。

塚谷　昨年度実践して、今年度はどのような点で成果が見られているか教えてほしい。

発表者　昨年度、赴任した際に、道徳教育、特別支援関係、授業研究など、ある程度決めていたが、具体的な所まで教職員に伝えることが難しかった。そこで昨年度中に現職教育で共通理解したことで、今年度４月のスタートからスムーズに取り組めたことが成果である。

板庇　各教職員がもっている知識や技能を同僚に伝えるミニレクの時間（２５分）は実際に行う教員にとって負担ではないか。

発表者　先生方は「とても勉強になった　良かった」と言ってくれたが、放課後の時間がなくなり、きついときもあったと聞いている。早めに提案することで見通しが立てるようにした。伝達講習は１／３程度だった。

伊部　ミニレクについて　実施に行った先生方は自己有用感やプレゼン力が高まったと言われたが、逆にミニレクを受けた、聞いた先生方はどれくらいその後の授業等で浸透し、効果が見られたか。

発表者　実際、その後の授業につながったかとは言えないかもしれないが、「私が学級経営で大事にしていたことは・・・です。」「私がいつも大事にしている絵本は・・・です。」など、聞くことによって私自身はもとより先生方にとっても学ぶことが多かった。また、その先生の新しいことが分かり新鮮な気持ちになると感じた。

◎グループ協議の内容

Ａ

・放課後も担任は忙しくしているため、教職員にゆっくり話しかける時間がとれないことが課題である。
・初任者が増えている。何もかもが初めてであるため、丁寧に指導している。特に、日頃の授業を大切にするよう指導している。
・校長、教頭、教務主任が打ち合わせする時間を確保できると良い。

Ｂ

・多忙化のため、授業をすすんで見せようとする先生は少ない。指導案を作成しないようにするなど取り組みやすい内容にする必要がある。
・全員で集まって参観したり協議したりするのは負担が大きいため、今後改善が必要である。
・発表のように、あまり校務に関係のない自分の得意分野でのミニレクはよい。
・校内研修でタブレット導入に向けて、活用を図る研修会を実施した。
・伝達するだけに終わって身につかないことも考えられる。

Ｃ

・先生の間で研究に温度差が見られる。４０代５０代の先生が多く、新しい取り組みが難しい。ミドルリーダーから上の意識改革が必要である。また、働き方改革とのバランスが難しい。
・「この行事は止めよう」という意見が出たときは、代替案を聞くことにしている。
・学校評価が次に生きていないことが課題である。毎年１２月評価、２月話し合いを行っているがなかなか次年度につながらない。同じ事の繰り返しはさけたい。

Ｄ

・一人一公開授業よりもペア参観の方が負担感が少ない。
・相手の気持ちを考えられない人は、保護者対応も丁寧にできない。全員で支え合っているが、このような教職員へのＯＪＴは難しいと感じる。

（文責：越前町立常盤小学校　山本　一博）

第５分科会　　―　危機管理（危機対応）　―

研究課題　　命を守る防災教育・安全教育の推進

研究発表題　　防災教育を通した児童の防災意識の高揚と、
防災拠点としての学校の存在意義を再確認した学校・地域の意識改革

福井市本郷小学校長　新道　正芳

Ⅰ　研究の視点

昨今、全国各地で自然災害による被災が見られる中、福井市でも過去に、震災、水害や雪害など、多くの自然災害に見舞われ、その都度乗り越え甦ってきた。こうした経験を後世に伝え生かすために、次の点において、実践・研究を進めた。

(1) 防災教育を通した児童の防災意識の高揚

自分の命は自分で守ることを実践できる子供を育てるために、これまでの経験を生かす教育を実践する。

(2) 防災拠点としての学校の存在意義を再確認した学校･地域の意識改革

職員が自校の置かれている環境を理解し、防災拠点としての学校の在り方を考え､地域と共有を図り、避難所としての運用をイメージする。

Ⅱ　研究の概要

(1) 危機管理マニュアルの整備、防災設備の把握と拡充

本校は、福井市上郷、下郷両小学校統合に伴い、山を削って高台を造成し校舎を新築した。福井市地域防災計画でも、学校施設を山間部に居住する地域住民の避難所にする目的がある。このことから、立地条件を考慮し自然災害を視野に入れ危機管理マニュアルを策定・改訂してきた。

防災設備では、職員室内防災無線、緊急時備蓄倉庫、太陽光パネル等が設置され、臨時ヘリポート用誘導灯設備や体育館での Wi-Fi 使用が可能な設備、緊急地震速報通報設備等が導入された。

(2) 防災訓練、避難訓練等の見直し

年間３回実施してきた避難訓練の想定を地震による火災発生だけで無く、地震による山崩れや、緊急地震速報によるシェイクアウト(地震時安全確保行動)からの避難実施など､より具体性のある訓練を実施した。また、毎年６月に実施される福井市防災訓練などに児童自ら積極的に参加するなど、意識改革を促した。

(3) 防災教室の実施と防災教育推進

平成 29 年度から防災教室を教育課程に位置づけ、5･6 年児童対象に実施している。ハザードマップにより、校区内のどこが土砂災害危険箇所となっているか、また自分たちの居住地区の現状がどうか、さらに土砂災害から身を守る方法などについて、学んでいる。

(4) 避難所開設マニュアル策定と地域との連携

福井市では小学校区単位で一つ以上の公民館が設置され、気象警報が出されると公民館が第１次避難所となる。しかし、地震被害の場合は公民館ではなく小学校が第１次避難場所となることを、本校を含め、福井市の教職員が十分認識できていない。そこで、現危機管理マニュアルに無い避難所開設についての手順をマニュアル化することに着手した。

ア　災害発生時の教職員の参集について
イ　災害発生(避難開始)時の学校が行う措置
ウ　自主避難所開設準備、運営委員会役割分担

など、時系列で手順を示し、その後の避難所運営委員会へ移行するまでの流れを図式化した。さらに、今回作成したマニュアルを地域の自治会連合会や地域防災組織に提案し、地域の意見を求め、より実効的な避難所開設マニュアルへの改良を目指す。

Ⅲ　まとめ

(1) 成果

子供たちに防災教育を進めたり、防災拠点としての学校施設の設備等を職員が認識したりして、被災した時や学校が避難所となった時の状況をイメージすることは必要な意識改革であり、これからの生活や学校運営にとってプラスになった。

(2) 課題

備えるための防災教育であって、今後の生活への不安を煽るものでは無く、正しい認識と建設的な防災意識の高揚を狙いとしなければならない。万一学校が避難所となっても、遅延無く開設運営ができる準備を怠らないことは難しいが、重要である。

◎研究協議内容

伊部　学校と地域や行政との窓口は誰か。

発表者　校長自身である。市教委保健給食課を通して危機管理部とすりあわせた。

森本　防災備蓄倉庫の中身は何か。

発表者　本校の場合、８割が水である。他に食料や簡易トイレがある。学校によって違う。

森本　避難所として開設した経験があるが、物がどこにあり、備蓄している以外のテレビなど学校の備品も提供したが、どこまで学校が携わっていくのか悩むところ。

発表者　開設経験は貴重。昨年の東陸大会では、他県の校長は危機意識を高くもち取り組んでいる様子であった。

森本　避難所に入ってくる人数に関係なく、一般人が入ってくることで大変な状況になり、十分な対応ができない。

寺腰　開設経験がある。敦賀市は原子力発電所が近いこともあり、防災ラジオが配付されており、災害対策本部から順次連絡が入る。学校は、その指示に従って動いた。備蓄品は飲み物、乾パン、かたパン（敦賀名物）など保存食。他に車椅子やおむつを替える場所、授乳室が必要であった。

発表者　管理職に情報が入ってくるのか。

寺腰　市防災対策本部のメールに登録している。

森本　本町は、校長ラインがあり、情報が入る。

発表者　福井市は公民館が先になり、学校は後手になる。

司会者　職員の意識の変化とはどのようなものか。

発表者　訓練で、より現実に即した内容で計画するようになった。

司会者　地域による特色がありそれぞれの立場での対応が必要なようだ。現実味のある訓練も大切になってくる。

◎グループ協議内容

Ａ

・取組は学校によって様々であり、災害の有無によって積極性に差が出ている。
・ハザードマップを使った教育を行うことがあるが、誤った認識を植え付けないかと躊躇することもある。
・避難所開設については、市町で違い、行政が行うので学校はノータッチであったり、行政の方が来てもわからなかったりということもあるようだ。
・避難所開設マニュアルが学校にあるが、今の状況と合わなくなっていることもあり、教頭会で見直しを始めているところがある。
・「いじめや不登校」の危機管理については、各学校がかなり力を入れているといった様子である。
・いじめの報告は横ばいの学校が多い。
・不登校については、夏季休業後など境目に陥ることが多い現状を確認した。また、兄弟で不登校になるケースが多いことも話題に出た。
・危機管理システムの構築について、特に、熱中症対策について話題が上がり、ＷＢＧＴ（暑さ指数）を用いた対応が多い。
・プールの開放については、行政がホームページで一斉に知らせたり教員とＰＴＡが判断したりと差がある。
・暑さを考慮し、プール開放を午後から午前中に移行したところもある。

Ｂ～Ｄ

・年間５～６回の防災訓練を行う。
・学校の鍵を貸して行政に任せる所や、避難所は学校では無く公民館等の施設に指定されており全く関与しない所もある。
・地域の過去の災害時の映像を視聴し、災害の記録を受け継いでいく教育は効果的である。
・避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）は、開設訓練に役立つ。
・防災教育の基本は行政や学校に任せて頼むのではなく、自分たちでなんとかしていく意識を育てることである。
・大きな地区（市）で同じマニュアルにしていくのは無理があるので、小さな校区などでその地区にあったマニュアルを作成していく必要がある。
・耐震、空調など、学校が避難所として適した施設となっているかどうか等も含め、行政のマニュアルの再整備の必要を感じる。
・ＳＮＳ等のいじめについては、学校の限界を感じる。
・家庭教育について、学校教育だけでなく社会教育も含めた生涯学習の視点から強化、実施していくことが必要。

（文責：福井市安居小学校　田中　範継）

第６分科会　　―　社会形成能力　―

研究課題　　社会形成能力を育む教育の推進
研究発表題　　子供たちの夢や希望を育むキャリア教育の推進
～地域との連携による教育活動の推進と校長の役割～

永平寺町御陵小学校長　　増田　実典

Ⅰ　研究の視点

永平寺町では、町学校教育方針「ふるさと永平寺を誇りに思える魅力ある学校づくりをめざして」のもと、小中１０校が足並みをそろえ、学校教育を推進している。特に小学校においては、校区の地域との連携に重点を置き、体験的な学習活動に取り組んでいる。

学校においては、このような体験的な学習活動を充実させるとともに、家庭・地域との連携を図り、子供たちに様々な人々や社会との関わりをもてるような教育活動を推進していくことが重要である。そのような活動を通して、社会生活の基本的ルールを身につけ、社会の中での自己の役割を認識し、働くことの意義や夢をもつことの大切さを理解できるような子供たちを育てていきたい。

永平寺町の７小学校の活動の中で、ここでは、本校の「特色ある学校づくり」「地域と進める体験」の推進を一例として紹介しながら、学校や地域の実情に合わせた「地域との連携による教育活動」を通じて、子供たちの夢や希望を育むキャリア教育を推進する上での校長の役割を究明する。

Ⅱ　研究の概要

(1)　「特色ある学校作り推進事業」の取組

御陵小学校の特色としての文化を守り、さらに改善していきながら、学校愛・地域愛に結び付くような心情を育んでいく。

◎実情の把握

①学校や子供たちの現状と実態

②地域や保護者の方の考え

◎明確な方針の提示と「チーム学校」の強化

①平成３１年度のスクールプランの重点項目

・夢と希望をもち、互いに認め合える学校
(学力の向上・特別支援教育の充実)

・学校と地域を自慢できる子どもたち
(野菜づくり・花づくり活動)

(2)　「地域と進める体験推進事業」の取組

本校は、平成３０年度～令和２年度の３年間、県事業「地域と進める体験推進事業」に取り組んでいる。地域コーディネーターの方を中心に、地域との連携を図りながら、地域の特性を生かした取組を展開している。

◎地域との連携、協働の推進

①米作り体験(５、６年)…
田植え・稲刈り・御陵つ子米販売

②野菜の栽培体験Ⅰ(１、２年生)…
サツマイモの苗植え、収穫、調理

③野菜の栽培体験Ⅱ(３、４年生)…
五領たまねぎの苗植え、収穫、調理

④学校林体験(６年生)…
記念植樹・学校林の歴史講習

Ⅲ　まとめ

(1)　成果

・児童の地域への関心の高まり
・児童の自己有用感や自信の高まり
・地域の方々の学校への関心の高まり
・地域の方々の協力体制の広がり

(2)　課題　(学校として)

・組織的・継続的な体制づくり
・地域への宣伝、広報
・地域人材の発掘(人の輪)
・校内人材の育成、若手の育成
★これらの課題を解決していくための方法と時間の工夫が大きな課題である。

校長は、学校や地域の実情を的確に把握し、キャリア教育の推進に向けた明確な方針の提示をし、適切な組織を編成し、組織の強化、地域との連携・協働を図るなど、至るところでリーダーシップを発揮して学校教育活動を進めていかなくてはならない。

◎研究協議内容

内藤　研究の発表の中で、『こういうふうにしました。こうなりました。』という実例は挙げているが、検証する方法、何で測るのかがはっきり示されていない。例えば、自己有用感とか自信の高まり、地域への関心の高まりを測るとしたら、振り返りアンケートを載せるとか、スクールプランの中に数値目標を提示していると思うので、その数値を見ながら子供たちのアンケートや保護者のアンケートの結果と比較しないと研究として、説得力に欠けるのではないか。校長として１年間の学校経営の中で、自分の思いがどれだけ実現したかを数値で示すと、大きな説得力を持つ。私自身が思い悩んでいることは、自分が立てたスクールプランの目標に対して、学校の先生方はある程度分かってくれる。同じ教職という立場で、考えていることもほぼ同じスタンスで、こちらの思いをくんでアンケートを書いてくれる。でも、子供や保護者のアンケートとなると、時間をかけて言葉を吟味していく。そうすると、提示したものと違った意味になってしまい、こちらの思いが本当に子供たちや保護者に伝わったかどうか分からない。数値だけ見ているとよい結果にならないケースも出てくる。では、どうやったら自分のやりたかったことが子供たちに浸透して、保護者に伝わったといえるのか。アンケートの手段と子供たちの感想文を担任からもらう。保護者からの苦情、学期末にもらう意見を拾っていく。それらから、自分のやりたかったことが本当に保護者に伝わったかが確認できる。こういうことが挙げられるとよい研究発表になると思う。

発表者　本校の子供たちはアンケートをとると高い評価になる。子供たち自身、いろいろな活動に満足できていると感じている。学校評価の中にスクールプランに関係のある項目はあるが、この活動に絞った項目のアンケートをとっていないので、具体的な数値の結果を出せなかった。この資料をまとめるに当たって、子供たちの作文を読んで、私なりにまとめた。今後は、楽しく活動している動画を撮ったり、活動内容に合ったアンケートをとったりしていく。保護者には、子供たちが書いた作文を抜粋して、学校便りに掲載して知らせてきた。

内藤　私の学校には給食畑があり、昨年度まではサポートしてくれる地域の方がいたが、今年度は手を引かれてしまい、ボランティアの方２人になってしまった。発表の中に出てきた米作り体験や学校林活動を請け負ってくれる地域の方々が具体的に何人ぐらいいるのか。

発表者　学校林活動については、１５人程度だった。米作りについては、地域の方保護者も含めて５名程度だった。畑作りについても５名程度だった。呼びかけてもなかなか広まっていかない。御陵地区は、新しく入ってこられた方も多く、核家族が多い。だから、このような活動を進めていくのに難しさを感じている。

河野　前任校の上志比小では、教育課程内で米作りをしていたので、子供が卒業すると、手伝ってくれる祖父母がいなくなってしまった。１年間米作りをやめた。翌年、校区内の知り合いの方で、核となる５人ぐらいの人に手伝いをお願いした。２年目からはＰＴＡ行事にしてしまった。春は田植え、秋は稲刈りをＰＴＡの行事として行った。水管理はＰＴＡの役員に頼んだ。そして、収穫した米を自分たちで食べるのをやめて、道の駅で販売した。３年目には、軌道に乗った。

◎グループ協議内容

・目当て、目的を定めて活動を進めることが大事である。
・修学旅行中、京都で自作パンフレットを使って、ふるさとＰＲを行った。
・縦割りの活動を大切にしている。高校生がプレゼン等で小学生に学校紹介を行っている。
・地域や保護者に説明をし、行事を精査し何に力を入れているのかを明確にするのは、校長の役割である。
・地域に出かけてボランティア活動をすることで、地域の方から感謝の言葉をいただけるので、自己有用感の高まりにつながる。
・キャリア教育は、職場体験ばかりでなく、夢を持ち、育てることでもある。
・地域の人に来てもらうと、逆に地域から協力を求められ、負担が増すこともある。
・統合１年目の学校では、やはり地域とのつながりが難しい。
・地域の行事には、無理のない参加をしていく。

（文責：永平寺町志比南小学校　川鰭和実）

第７分科会　　―　自立と共生　―

研究課題　　自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

研究発表題　　温かい学校づくりを支える特別支援教育の推進

あわら市本荘小学校長　志田　智子

Ⅰ　研究の視点

誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会の実現が、求められている。障がいの有無にかかわらず、子ども達が相互に認め合い、自立しともに生きようとする温かい心の育ちを支えたいと考える。

小学校における特別支援教育は、校長のリーダーシップのもと、全教職員が一体となって取り組まなければならない。支援を要する児童に対しては、学校生活全般の中で途切れのない支援が必要である。そして、その取組は、「自立」を目指す個別の教育的ニーズのある児童に対してだけではなく、仲間として「共生」していく児童たちをも視野に入れていく必要がある。

どの子にとっても「仲間がいて、居場所がある、温かい学びと生活の場」としての学校づくりを支えるために、特別支援教育の推進に取り組んできた。

Ⅱ　研究の概要

本校の特別支援教育を推進するにあたり、キーワードを二つ設定した。

・「寄り添う」…ニーズに応じた支援や指導

・「つなぐ」　…関係機関との連携

そして、特別支援教育の推進を学校経営の一つの柱に位置づけ、温かい学校づくりに取り組んでいくこととした。

【寄り添う】

（１）　学校経営方針の明確化

特別支援教育推進の必要性を教職員に説明し、スクールプランに明記した。ＰＴＡの会議や学校だより等で、保護者や地域にも発信した。

（２）　児童に寄り添う

児童の状態に気づき、丁寧な把握に努めた。支援が必要な児童について、夏季休業中に教職員全員で「支援シート」を作成し適切な支援につなげた。交流学級での理解授業や全校でのソーシャルスキルトレーニングの実施などで、ともに育ち支え合う通常学級の児童たちの意識の向上を目指している。

（３）保護者に寄り添う

保護者と共通理解の下で育ちを支えるという視点で、校内支援会議を開催している。「基礎的環境整備」と「合理的配慮」の検討を、保護者とともに行った。学びの場の変更が必要な場合は、管理職が同席し、保護者の思いを丁寧に受け止めるようにしている。

（４）教員に寄り添う

どの子にとっても「分かる・できる」喜びのある授業に向けて、研修を実施した。特別支援教育の視点を取り入れ授業改善や環境整備にも取り組んでいる。

【つなぐ】

関係専門機関と効率的につながるために、校内体制の整備と充実を図った。また、「特別支援教育専門員学校訪問」を有効に活用し、専門員から助言を頂きながら支援を進めることができた。専門機関とのスムーズな連携につなぐことができた。

Ⅲ　まとめ

（１）成果

児童の情報の流れを一本化し状態把握が丁寧になったことで、情報共有から支援開始への迅速化が図られた。通常学級の担任においても、特別支援教育の知見を活かした授業づくりや指導法の工夫が見られるようになった。専門機関への要請も積極的になり、助言を得やすい環境づくりが進み、担任や担当者の負担軽減にもつながった。

（２）今後に向けて

特別支援教育の専門性を有する人材の確保や育成は、急務である。共生のために、「個に応じた支援を集団の中で浸透させていくこと」や「互いの違いを認め合える学級づくり」も重要である。途切れのない支援をつなげるためには、校種が上がっても特別支援教育が「選び取る教育」となるよう、体制の整備や人材の育成に努めたい。

◎研究協議内容

窪田　交流学級での理解授業について具体的に教えてほしい。また、1 年に何回くらい実施したのか。

発表者　坂井地区では、特学の研究の主題として「自己理解、他者理解」について研究を進めてきた。今日の発表で紹介したのは、特学の担任による交流学級においての「他者理解」として授業。こども園までは一緒に活動してきた子が、入学後違う場所で学習をしていることについて理解させ仲よくなってもらうことを目的に授業を行った。この授業は、校内研究授業も兼ねており、職員にとってもその児童への支援の仕方を理解する上でも有効であった。実施については、該当の学年で 1 回行った。担任の計画の下、進めていきたい。

千嶋　ソーシャルスキルトレーニング（以下、SST）の進め方について具体的に教えてほしい。

発表者　SST は市内の養教部会で取り組みが進められている。やり方は、各学校の実情に応じて行われており、本校は、朝の活動の 10 分間で取り組んでいる。iPad に必要な内容を取り込み、担任が月に 2 回、教室でそれに基づいて取り組み、計画的に積み重ねていっている。振り返りは、簡単に書き留めておけるよう数字やイラストを用い記録を残し、言葉でも書ける欄も設けてある。ふり返りは、校長が全部目を通し朱書きしている。朝のあいさつを見ていると、児童の記録と一致することが多い。ふり返りは、家に持ち帰り保護者にも目を通してもらうようにしている。

前川　PTAや地区の方に特別支援のことを理解してもらうための説明の仕方について教えてほしい。

発表者　スクールプランの中に特別支援教育の推進を盛り込んであるので、その説明の中で行った。学級数が増えたこともあり、児童の歩みに寄り添っていきたい旨を話し、学校としての思いを伝えた。

小杉　「寄り添う」「つなぐ」をキーワードに始めた学校づくりはとても素晴らしい。「つなぐ」のキーワードとした校内体制づくりの中で、児童に関する情報を生徒指導に窓口を一本化したことでよかったこと、特コの人数、人事で人が入れ替わった後の構想について教えてほしい。

発表者　今年度の特コは、特担と養教の 2 名体制。生徒指導担当が学校全体の状況を把握したうえで、生徒指導・教育相談・特コが情報を共有し、主となる担当者を決め、学校全体に広めている。そういう体制が学校に根付いていくようにしたい。人材の育成も兼ねて流れを止めることのないようつないでいきたい。

◎グループ協議内容

A

・学校の規模に関わらずどの学校でも支援の必要な児童が出ており悩んでいる。児童への対応だけでなく、保護者対応にも苦慮している。保護者への丁寧な関わりが必要であり、その時に、SC や SSW を間に挟んでもよいと思う。

・本分科会の研究領域である「自立と共生」の中で「寄り添う」というキーワードがとても良い。教員への寄り添いという視点で見ると、校長が授業を見て、教員の授業力の向上を図る必要がある。

・学校全体や交流学級の、特別支援を必要とする児童への理解を進める指導が大切である。

・中学校へのつなぎを大切にしたい。小学校での支援が途切れることのないよう丁寧な移行支援をしていかなければならない。

B

・特支教育の推進における校長のリーダー性について、まずは人事に関わること（校内人事、教委との交渉など）が重要ではないか。

・世代交代が進む中で、どう人材を育成していくか。

C

・特学については特別支援の免許の有無も大事だが、支援教育の充実のためには、人材・人数の確保が大切である。

・児童についての情報共有のために、朝礼を終礼に変更した。終礼後に情報交換の時間を設けたことで、共通理解を図りながら指導していく体制ができた。

D

・専門家に定期的に来校してもらいカンファレンスを行っている。

・児童が低学年であるほど、保護者への伝え方が難しいと感じる。

・理解教育は大切。児童同士の関わりの中で自然に理解していくこともある。

（文責 ： あわら市北潟小学校　番匠　裕美子）

第８分科会　　ー 連携・接続 ー
研究課題　　家庭・地域・異校種等との連携・接続の推進
研究発表題　　子どもの連続的な成長を育む小中接続を目指して

高浜町立和田小学校長　　平田　克明

Ⅰ　研究の視点

学校は、次世代を創造していく子どもの育成を担っている。しかしながら、子どもを取り巻く課題はますます複雑化し、将来を見据えた長期的な展望に立った学校経営ビジョンが求められている。特に、保幼・小・中学校が教育の連続性を意図した連携・接続（縦のつながりを重視した教育活動）が必要となっている。

大飯郡の小中学校では、義務教育９年間を通して児童生徒の成長を積み上げていくため、中学校区における学びの連続性を重視して、児童生徒の実態や学校・地域の特色を踏まえた学校経営に取り組んでいる。そこで、円滑で効果的な小中連携・接続を推進する上での校長の役割とは何かを示しながら、具体的な方策と成果を明らかにしたい。

Ⅱ　研究の概要

大飯郡校長学校運営研究会では、中学校区での連携・接続事業を重点に、以下の３点を目指すべき研究の方向とした。また、校長のリーダーシップとしては、小中学校長連携会議を踏まえての推進計画の設定と組織的な取組にするための PDCA サイクルの在り方となる。活動指針･ビジョンの明確さと共有、活動意義や重要性の周知、検証・改善を図るためのマネジメントの工夫等で校長の果たすべき役割と指導性を究明する。

（１）カリキュラムによる指導者交流の取組

①内浦小中学校の授業交流

・併設校の特色を生かして、小・中教員が教科指導で交流（教科担任制）

②名田庄中学校区の授業参観・研究交流

・隣接立地を生かして、小・中教員が協働で授業力向上（協働研究）

③大飯中学校区の授業研究・出前授業

・校区内小学６年生授業へ数学・英語等教員が教科指導で連携・協働

（２）グランドデザイン（学校経営ビジョン）をもとにした連携・接続

①各中学校区の校風の共有

・目指す児童生徒像、規範意識の徹底、重点指導「挨拶」「無言清掃」「靴揃え」等

②各町の人権教育の推進

・基本方針、研究主題、活動指針、小中合同研究会による部会別研究会、

（３）小中交流事業による教育活動の推進

①中学校体験入学・部活動体験

・小学６年生が各中学校へ（ガイダンス）

②ノーメディアの日・学習の手引き

・中学校のテストに合わせて（課題改善）

③ボランティア活動による交流

・中学生が各出身小学校や地域行事に

④中学校各行事の公開（家庭・地域連携）

Ⅲ　まとめ

（１）成果

①小中接続を学校経営ビジョンに位置づけて学校経営を行うことにより、授業改善をはじめ、日常の教育活動において、これまでの「連携」から小中９年間を見通した指導やつながりを意識した「接続」への意識改革につながった。

②小中接続を意識して情報発信していくことで家庭・地域との関係が深まり、児童生徒自身においても地域の一員としての自覚を向上させ、地域の将来を切り拓いていく生き方や将来像をとらえやすくしている。

（２）課題

今後は、ますます異校種間接続が重要になっていく。校長は、児童生徒の実態や取組の状況等を定期的に検証し、育成する資質・能力を改善していく必要がある。それに対応して、学校教育方針や学校経営ビジョンに反映させたり重点事項を見直したりすることが求められる。

◎研究協議内容

田中　小中連携の取組の中でノーメディアに関するものがあったが、この取組の目的や方向性、また、どのような考えでこの取組が生まれてきたのかを教えてほしい。

発表者

学校側としては、子どもの規則正しい生活習慣を確立していくことと学力の向上とを目的として取り組んできた。課題として、学校だけではなく家庭との連携の充実や地域との連携が挙げられる。高浜町では住民福祉課が主体となり町ぐるみで取り組んでいる。また、地域によって実態が異なり、大飯郡として共通して取り組むことが難しい。今後の方向性については、中学校区毎のグラウンドデザインが必要である。現在は、あいさつ、靴をそろえる、黙働清掃を基本として取り組んでいる。また、学校の取組を地域に発信して地域の理解と協力を得ながら進める必要がある。さらに、高校進学に向けてのステップも考えていかなければならない。

◎グループ協議内容

Ａ

視点（１）家庭・地域等と連携し、課題解決に向けて取り組む学校づくりの推進について

・地域のＮＰＯ法人に加わってもらい、地域と進める体験活動を進めている。写生大会で町の良さを児童に伝えたり、児童の活動を見守ったり、さらに、地域学習の講師や家庭地域学校協議会委員を引き受けて頂いたりしている。

・業務改善と連携は相反するところがある。地域行事へ参加する場合、事前指導や児童引率、事後指導等の時間が必要となる。参加行事の精選や取組の見直しを校長としてバランスをとりながら調整していきたい。

視点（２）異校種間の連携と円滑な接続を図るための組織的な取り組みの推進について

・小中連携を重視すると小学校の独自性が発揮しづらくなる。また、規模の違う小学校では連携しづらく最小限のことしか話し合えない。

Ｂ～Ｄ

・指導主事訪問の授業を見合ったり、「小中交流プラン」によって連携をしたりしている。小中の教員で協議し、中１ギャップの解消を図っている。小学校の横の連携も必要である。長く続けるためには、ゆるい連携である方がよい。

・地域と学校のつながりが深い。地域で低・中の部会や研究部会、生徒指導部会を開催し、地域でつながっている。また、校長と教頭でプランニングする会がある。

・中学校区で学習指導、生徒指導、健康部会に分かれて取り組んでいる。中１ギャップ解消のため「ようこそ先輩」の交流、音楽交流がある。保幼小の接続会議も実施している。中学校教員の出前授業はあるが教員の負担が大きい。

・３つの小学校が統合する前に小学校の合同授業を実施した。成果として、特別支援学級の児童の不適応がなかった。

・中学校の授業の事前研究会に小学校の教員が参加してアドバイスをすることで小中の授業のギャップを埋めることができた。

・ノーメディアについて、中学校区で話し合いを行い、中学生を中心に取り組み方を考えている。

・「早寝、早起き、朝ご飯」を保育園で徹底したいと考え、講演会を実施したが参加者が少なかった。連携の根っこの部分を保幼小中できちんと合わせることが必要である。

・他市町から多くの児童が転入してきて、その保護者たちは、この地域の良さをわかってくれている。校長として、学校や地域の良さを発信していくことも大切な役割である。

・中学校区において小学校の実態が異なり、連携の取組を統一することが難しい。現在、特別支援教育に視点を当て、夏季研修会を行ったり、社会福祉協議会と協力して講師を招聘し特別支援教室の実践発表を聞く機会を設けたりしている。

・今年度から中学校区で人権教育の指定を受け、小中で連携した取組を始めた。外国人の子どもたちが増加傾向にあり、「多文化共生」をテーマに学校毎の取組を開始している。協力校として仁愛大学があり、大学生が出前授業をしてくれたり、研究授業を参観したり、環境整備を手伝ってくれたりしている。

・小中連携の取組について内容を減らす傾向にある。

（文責：おおい町立佐分利小学校　藤田　和彦）

福井県小学校長教育研究大会主題・副題一覧表

年度	大　会　主　題　（副　題）	開催地
55	世界から信頼される誠意と信念に満ちた日本人の育成 (新教育課程のめざす豊かな人間性の追求)	東海・北陸 福井大会
56	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (創意ある教育経営の実践)	大野市
57	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (意欲あふれる小学校教育の創造)	武生市
58	人間性豊かな児童の育成をめざす教育の創造 (教育経営理念に立つ自校の教育構想と展開)	小浜市
59	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	鯖江市
60	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	坂井郡
61	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	敦賀市
62	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (自ら学び、豊かな心を持ち、たくましく生き抜く子どもの育成)	東海・北陸 福井大会
63	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (厳しく自己確立をめざす子どもの育成)	勝山市
平元	21 世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (信頼と愛情につながる育成を求めて)	大野市
2	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子の育成)	武生市
3	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (世界をみつめ、広い心をもっ実践力のある児童の育成)	小浜市
4	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざすノｈ学校教育の創造 (自ら学ぶ意欲とたくましい実践力のある児童の育成)	鯖江市
5	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子どもの育成)	坂井郡
6	21 世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (豊かな心を培い、たくましく生きる子どもの育成)	福井市
7	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自己確立できる人間を育てる学校像の創造と具現)	敦賀市
8	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自ら考え、主体的に判断し、心豊かで、たくましく行動できる児童)	勝山市
9	第 49 回全国連合小学校長会研究協議会 第 32 回東海・北陸地区連合小学校長会教育研究大会	福井市
10	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自ら生きる力を切り拓き、21 世紀にはばたく子どもの育成)	武生市
11	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (個性を尊重し合い、豊かな自己実現を目指す児童の育成)	小浜市
12	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と自己実現を目指す確かな力をもっ子どもの育成)	鯖江市

年度	大　会　主　題　（副　題）	開催地
13	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな感性と確かな知性をはぐくむ学校経営を目指して）	坂井郡
14	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進　（豊かな心と確かな力を持ち、共生社会を生きる児童の育成）	大野市
15	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進　（豊かな心とかかわる力をもち、共に生きる児童の育成）	三方郡
16	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教青の推進（豊かな心と自ら学び続ける力を持ち、たくましく生きる子供の育成）	東海・北陸福井大会
17	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心とたくましく生き抜く力を持ち、共に歩む子供の育成）	武生市
18	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、たくましく生き抜いて自己実現を図る子どもの育成）	高浜町
19	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、健やかでたくましく生き抜く子どもの育成）	鯖江市
20	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（確かな学力をもち、心豊かにたくましく生きる子どもの育成）	坂井地区
21	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、自立と共生を目指す子どもの育成）	勝山市
22	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力をもち、未来を拓く子どもの育成）	敦賀市
23	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢をもってたくましく生きる児童の育成）	東海・北陸福井大会
24	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて挑戦する子どもの育成）	越前市
25	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	若狭町
26	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	越前町
27	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	坂井市
28	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	大野市
29	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	敦賀市
30	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子供の育成）	越前市
令元	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進（豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子供の育成）	小浜市

あ　と　が　き

令和元年。昭和・平成を経て令和の時代を迎えました。

折しも、世の中では2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、様々な動きが目に見えるようになってきています。スポーツの祭典、平和の祭典といわれる両大会が、「超スマート社会（Society5.0)」に向けて動き始めている今日、日本で開催されることは大変興味深いことです。

様々な人たちがそれぞれに能力を発揮して、充実した人生を送ることのできる社会は、いうまでもなく教育の力なくして実現できません。私たちは、そのような社会の実現に向かって努力する人材を育成する最前線にたっています。ですから、新学習指導要領の全面実施を控え、人間としての強みはどこにあるのか、学びや仕事にどのように向き合っていけばよいのかについて、常に識見を高めていけるよう研鑽を積んでいきたいものです。

福井県小学校長会は、第71回福井県小学校長教育研究若狭大会を、福井県教育委員会教育長 豊北欽　様、小浜市長 松崎晃治様をはじめ、多数のご来賓をお迎えして、ＪＡ若狭会館・小浜市立小浜美郷小学校を会場として盛大に開催することができました。働き方改革の視点を堅持しながら、新しい学習指導要領に基づく令和の時代の小学校教育をどのように進めていくのか、私たち校長の力量が試されています。大きなやりがいを感じるところです。

そんな中で開催を迎えた若狭大会。８つの分科会に分かれ、私たちが本音で語り合い、学校現場の直面する課題に正対できたことは大変意義深く、大きな成果といってよいと思います。

会員のみなさまにおかれましては、若狭大会の成果を収録した本研究紀要をご一読いただき、今後の本県小学校教育推進の一助にしていただければ幸いに存じます。本大会において、貴重な提案発表をしていただいた各ブロックの校長先生方、そして、記録・編集等の任に当たられました関係各位のご苦労に対しまして深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、本大会のために、物心両面にわたりご指導・ご支援をいただきました福井県教育委員会、小浜市、高浜町、おおい町、若狭町、並びに緻密な準備・円滑な運営に誠心誠意ご尽力いただきました若狭地区の校長先生方に、衷心より感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。

ありがとうございました。

福井県小学校長教育研究委員長
小浜市立小浜小学校長
森　徳実